

現代青年の生活意識についての一考察

——遠藤他の論文へのコメント——

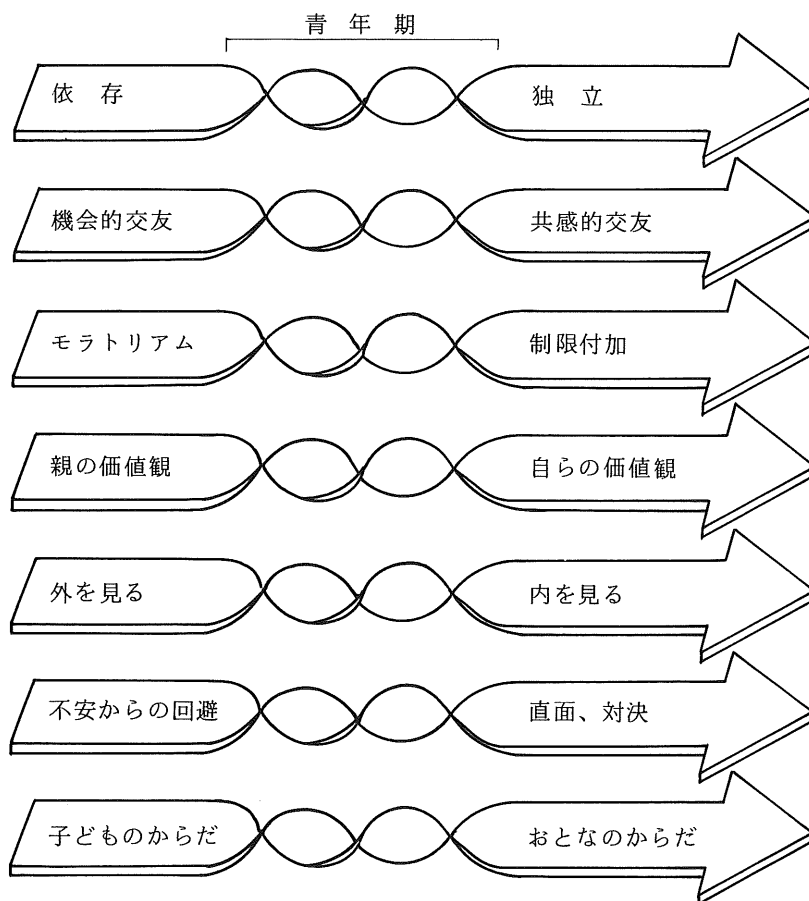
名古屋市立大学医学部精神医学教室

清水 將之
奥村 透

1. はじめに

青年期は疾風怒涛の時代とも呼ばれ、うつろい易さ、時代や文化の影響を直接受けること、傷つき易さなどのために、輪郭を明瞭に描き出すことが人生の内でもっとも困難なライフ・ステージであると言える。そのような心理的に不安定な日々を送りつつ、青年は十代の数年間に多くの発達課題を乗り越えることを求められている。多くの発達課題の一部をここに図示しておこう。

図 青年期の発達課題



これらの発達課題は一瞥すれば容易に理解されるように、依存から独立への転換といったようにいわば180度の意識変換を迫られるほどのものである。古くから青年期危機とか成熟危機という表現が青年期問題を語るに際してしばしば用いられているのは、そのような事情に由来するであろう。また、精神科の主な疾病が出そろうのが青年期であり、登校拒否、家庭内暴力、非行など疾病近縁の問題(paraclinical problems)がこの年代層に多発するのも、そのことと何らかの関係があると考えられる。

そういった問題の背景があるので、青年の生活意識を把握し論議するのはなかなか容易でない。今回遠藤他が執筆された論文は、女子非行少年の研究であると同時に、現代日本における青年の生活意識を特殊な角度から照射したという大きな意義を持っていると考えられる。

2. 遠藤他の論文を読む

清水と奥村による『女子高校生の意識と健康観についての調査』票を用いて、一般高校生女子と女子少年院在院者とをこの研究では比較しているが、多くの問題に関して両者の間に統計的有意差が見いだされることに驚かされる。もっとも、著者が指摘しているように、地域差、対象の生活状況の差、年齢構成のズレなど多くの点で、2群の間に質的差異が存在するので、今回の所見を単純に意味づけるには危険があるであろう。

遠藤他は13種の下位項目にアンケートの設問をカテゴリー化して分析を行っているが、われわれは精神科臨床の視点から全項目を眺め直し、一般対人関係、自己像、身体面の問題という3側面から、同じ研究素材を眺め直してみたい。

(1) 生活意識ないし一般対人関係を巡って

交遊関係に関する項目を眺めると、「本当の友達がない」「好かれていない」という項目で非行群が対照群より有意に多いことが注目される。「話題についてゆけないのではないかと不安」と考える者が多いのも、これらと同じ対人過敏の表出として理解することができる。これは、「どこにも居場所がない」と考える者が有意に多いことと表裏をなす所見であろう。このことと関連付けて見ると、「目立たず静かに暮らしたい」とする者が非行群に有意に多いのは、孤立状況への合理化であるとも読むことができよう。

「父と気が合わない」「大人は信用できない」などが非行群に有意に多く、これは一般に非行少年の特徴の一部として言われている年長者や大人の世代に対する反抗の表明であると読むこともできる。しかし、次に述べる結婚観についての所見を見ると、伝統的な発想の中に生きていることが示されており、この2項目の有意差から大人への反抗を読み取ることは慎重でなければならないと考えさせられる。このようなところにも、非行問題の多重構造が露呈しており、安易な分析を行ってはならないと考えられる。結婚観については、「一生独身で通したい」の項目で対照群との間に有意差を見るが、対象の13.6%を占めるに過ぎず、「結婚すれば専業主婦になりたい」「女の幸せは、結婚して子供を育てることにある」の2項目で有意差を示していることが注目される。もっとも、「親に言われたことはよく守る」のが、対照群に有意に多いのは、非行群における親への反抗ないし自己主張の表現である可能性が推測される。

(2) 自己像について

青年期にある若者は、自己像を明確に描くことがしばしば困難であると指摘されている。それ

は、前章で述べた自我状態の流動性によるのであろう。そのことを留保した上で自己像を考えなければならぬが、遠藤他の論文の場合、対象が矯正施設入所中の青年であることから、いい子反応としてのバイアスがかかっているという可能性も考慮しておかねばならないであろう。

そのような前提を踏まえた上でもなお、非行群の自己像の悪さが目につく。例えば、「何か失敗しそうでこわい」「苦しいことが多い」「いつも何か悪いことが起こりそうな気がする」などが非行群に有意に高いのは、生活の現状に満足を見いだせず、良好な未来展望を抱けないもどかしさが表現されていると見ることができるのではないか。関連した項目で「自分で自分がいやになる」「自分は駄目な人間だと思ってしまうことがある」の2項目でも非行群が有意差を示しているが、これらの項目では対照群も含めて60～89%が「はい」と答えているので、これは十代後半(青年中期)の一般的な心性であると理解するのが妥当であろう。

自己イメージの悪さと内的関連を有していると考えられる抑うつ指標が、非行群において対照群に比して有意に高かったことも注目される。すなわち、「死にたいと思うことがある」「悲しくて一人でいると泣けてくることもある」「最近、わけもなく寂しくなるときがある」などの諸項目である。

このような自己像の悪さ、抑うつ指標の高さといった特徴は、少年院在院者の矯正やカウンセリングを進めるに際して留意すべきところではなからうか。

「理想が非常に高い」「人間は感情よりも知性で生きるべきだ」という項目が有意に高いのは、いい子反応としてよりはむしろ、低い自己像の代償として理解される所見ではなからうか。他方、「ぬいぐるみや人形が大好きだ」という項目が対照群に比して多いのは、十代後半に至ってなお過渡対象を必要とするということで、成育過程において母子愛着から母子分離へのプロセスが円滑に進まなかった女子が非行群に多く含まれている可能性が示唆されており、これもカウンセリングにおいて留意する必要がある点であると考えられる。

(3) 身体を巡る問題

清水と奥村によって作成されたこのアンケート用紙は、本来拒食症(神経性無食欲症, anorexia nervosa)の疫学研究を目的として作成されたものであるが、遠藤他の論文の対象である少年院在院者も拒食症に関連する問題を数多く示していることが注目される。すなわち、以下の諸項目において、非行群は対照群よりも有意差を持って高い拒食傾向を示している。

- *スタイルを良くするためにダイエットしている
- *太るのが嫌で水気のあるものを控えている
- *このごろ全然おなかが空かない
- *もっと体重を減らしたい
- *食べ物の好き嫌いが激しい
- *ほっそりとした体つきの女性になりたい
- *イライラするとついやけ食いしてしまう
- *自分が食べるもののカロリー計算をよくする
- *食事は一人でする方が楽だ
- *痩せるためによく下剤を服用している

これらの項目は、拒食症患者がしばしば示す瘦身願望と食行動の障害と重なるものである。月経停止、便秘、胃がもたれて吐くなどの身体症状も拒食症に高頻度に見られる症状の一部である。

もちろんこれらの症状が多いからと言って、研究対象の女子が拒食症を発病し易いわけではない。奥村透の研究によれば、近年の一般高校生女子は全般に拒食症近似的の瘦身願望と食行動パターンを示す者が多いという。非行群もそれと同じベクトルを持っていても不思議ではない。しかしそのような傾向が対照群よりも有意に高いということの意味については、今後更なる研究が期待される。

「疲れ易い」「からだがだるい」「頭痛や肩こりがよくおこる」という項目でも有意差を認めるが、いずれも対照群をも含めて半数以上の者に見られる所見であるので、これらは最近の青年中期一般女子の健康問題として採り上げるべき問題ではないか。

3. 精神医学と非行

非行はある意味で青年精神医学の中心的問題であると表現することが可能である。それは、非行が伝統的な疾病モデルでは狭義の病気とすることはできないが精神医学が治療的アプローチを持っていること、成因・判定・治療等の全てにわたって、精神医学、社会学、教育学、犯罪学、教育実践、心理学等、多くの分野にまたがって非行という現象が成立していること、非行は青年期という人格の成熟過程と切り離しては理解ができない問題であることなどの諸特徴が、青年精神医学の枠組みと丁度重なるからである。

古くはピネルやプリチャードが、今世紀の始めにはヒーリー、アレキサンダー、フリードレンダーなど多くの精神医学が非行問題の理解や(広義の)治療に取り組んできた。そして今、青年精神医学が一つの独立した領域として一般精神医学から自立を果たし、境界例研究に関連して行動化(acting out)の精神病理が詳細に研究され、非行に対する精神医学的研究は新たな位置に立たされていると考えられる。他方、暴力非行から遊び型非行へと問題の相貌も時代と共に変容し続けている。非行問題における精神医学の責任は更に大きなものとなってゆくものと考えられる。

4. おわりに

私事にわたって恐縮であるが、筆者の一人清水は昭和40年7月に全国に先駆けて大阪に思春期外来を開設し、爾来日本に青年精神医学を定着させることに専念してきた。この26年間に同僚と共に青年精神医学に関して多方面の研究と治療実践を行ってきた。しかし残念ながらその軌跡の中に非行問題が欠落している。今後、この部分を補完してゆかねばならぬと考えている。その意味で、遠藤他の論文から啓発されるところが大きかった。感謝して筆をおきたい。

参考文献

- 森 省二, 清水將之: 青年期の身体・行動症状について. 清水將之, 他(編)『青年精神病理第3巻』所収, 弘文堂, 東京, 1983.
- Okumura, T., et al.: Epidemiological study of anorexia nervosa. Reported at the Congress of WPA Budapest, Aug. 1991.
- 清水將之, 森 省二: 『青年期境界例』, 金原出版, 東京, 1984.
- 清水將之, 中里 均: 青年期精神医学の現況, 島菌安雄, 他編『青年精神医学』所収, メジカルビュー社, 東京, 1987.
- 清水將之: 『青年期と現代』, 弘文堂, 東京, 1990.
- 清水將之, 奥村 透, 他: 一般高校生における抑うつ学的研究『児童・思春期精神障害の成因及び治療に関する研究』, p. 31-48, 厚生省, 1991.
- 瓜生 武: 非行. 清水將之(編)『改訂増補青年期の精神科臨床』所収, 金剛出版, 東京, 1989.